新見公立短期大学紀要　第29巻　第２号
pp. 71－76, 2009

研究ノート

老年看護学領域における学生の卒業研究の動向

木下　香織*・古城　幸子

看護学科

（2009年２月４日受理）

本研究の目的は、老年看護学実習が4単位に規定された看護教育カリキュラム改正以降の卒業研究から、老年看護学領域における学生の関心の変化を明らかすることである。1999年～2007年の本学看護学科学生が「看護研究」で取り組んだ561件のうち、老年看護学領域に関する研究論文97件を分析対象とした。研究テーマは12グループに分類でき、「高齢者の理解に焦点をあてた研究」と「高齢者の看護に焦点をあてた研究」に大別できた。前者は、看護学生などを対象に高齢者イメージの測定、高齢者の生きがいなどQOLに関連する研究などであった。後者は、認知症高齢者のケア、具体的な老年看護学のケア方法、老年看護に関連する制度の認知度調査などであった。研究方法は調査研究が最も多く、面接調査や参加観察、質問紙調査など多様な方法を用いていた。学生の研究テーマの動向は、介護保険制度施行や「認知症」への名称変更など社会背景との関連がみられた。

（キーワード）卒業研究，高齢者，老年看護，動向

はじめに

1996年の看護教育カリキュラムの改正により、「老人看護学」から「老年看護学」と名称が変更され、臨地実習も従来の2単位から4単位となった。この指定規則の改正には、わが国の急速な高齢化や疾病構造の変化、家族介護力の低下など、高齢者を取り巻くさまざまな社会背景の変化が関連している。そこで、1996年の看護教育カリキュラム改正以後の老年看護学領域における学生の卒業研究の動向を分析し、学生の関心の変化を明らかにしたいと考えた。A短期大学看護学科の必修科目「看護研究」では、学生が関心のあるテーマを選定して１人１編の論文をまとめている。学生の関心や問題意識を大切にしながら、指導助言をおこなっていることがカリキュラムの特徴である[1]。看護教育カリキュラム改正以後に「看護研究」を受講した学生の論文を対象に、卒業研究の動向の分析を試みたのでここに報告する。

Ⅰ．研究目的

平成9年度看護教育カリキュラム以降の9年間の学生の卒業研究から、「高齢者」および「老年看護」に視点をおいた研究の動向を明らかにする。

Ⅱ．研究方法

1．**対象**：1999年から2007年にA短期大学看護学科学生が卒業研究として取り組んだ561編のうち、高齢者および老年看護に関する研究論文97編を分析対象とした。

2．**分析方法**：研究テーマの類似性、研究対象、研究方法について分類し、高齢者および老年看護に視点をおいた研究の動向を分析した。分析にあたっては、研究者間で検討を重ねておこなった。

3．**倫理的配慮**：「看護研究集録集」として公表された論文を対象とし、個人が特定される研究論文の著者名は分析対象から削除した。研究対象の年度の卒業生に、研究の趣旨や個人情報保護の方法について書面にて説明し、同意が得られない場合はE-mailでの連絡を受けつけた。

Ⅲ．結果

1．研究数の経時的変化

9年間の高齢者および老年看護に関する研究論文数の経時的変化を図1に示した。

9年間の研究は97編で、年平均の研究数は10編前後であった。1999年から2004年までは増加傾向で、2003年、2004年には15編以上であり、9年間のピークであった。2005年からは減少傾向で、10編前後の平均的な研究数であった。

*連絡先：木下香織　看護学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

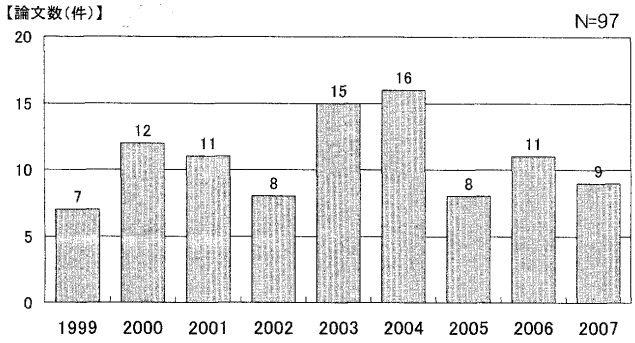

図1　研究論文数の経時的変化

2．研究テーマの内容と経時的変化

97編の研究テーマから類似性により、『高齢者の理解に焦点をあてた研究』と『高齢者の看護に焦点をあてた研究』に大別された。研究テーマのカテゴリーと研究論文数の経時的変化を表1に、カテゴリーと研究テーマの例を表2に、カテゴリーと研究対象者を表3に示した。

『高齢者の理解に焦点をあてた研究』は20編で5つのグループに分類できた。高齢者疑似体験や高齢者の生活をテーマに取り上げた「高齢者理解」は5編で、2000年にバリアフリー環境の検証をテーマにしたシリーズでの2編、2002～2004年に各1編であった。高校生や短期大学生などを対象とした「高齢者イメージ」は5編で、1999年に1編、2001、2005、2006年に各1編であった。生活の中での高齢者の人間関係を対象とした「高齢者の関係性」は2編で、2003および2005年に各1編であった。高齢者の生きがいなど「高齢者のQOL」は4編で、1999、2000年に各1編、2004年に2編であった。回想法や自分史を用いて高齢者理解を深める「ライフコースの視点」は4編で、2004、2007年に各2編であった。

『高齢者の看護に焦点をあてた研究』は77編で8つのグループに分類できた。「高齢者の生活の場」は7編で、ユニットケアや宅老所など新たなタイプの高齢者施設をテーマとして、2002～2005年に毎年1～3編であった。介護者のQOLや介護負担などを取り上げた「家族介護の支援」は14編で、研究数は2000年以降毎年1～4編であった。「老年看護のケア方法」は、アニマルセラピーや食事援助などさまざまな高齢者ケアに関するもので、2000年以降ほぼ毎年で計12編であった。「認知症高齢者のケア」は、言動の理解から家族介護者、施設ケアなど認知症ケアの幅広いテーマが取り組まれており、2001年以降ほぼ毎年で計14編の研究があった。「老年看護に関連する制度」は介護保険制度とそのサービスを中心に、シルバー人材センターや成年後見制度など17編で、1999、2000年は4、5編と多く、それ以降もほぼ毎年の取り組みがあった。身体抑制や虐待に関する4編は「老年看護と倫理」とまとめ、2000,2001、2003、2006年に各1編であった。看護と介護、高齢者施設の看護師の役割に関する4編は「看護の専門性」とまとめ、2001～2003年に集中していた。被災高齢者とそのサポートなどをテーマにした5編は「災害看護」とまとめ、2001年に2編、2003、2005、2006年に各1編であった。医療必要度の高い高齢者への看護に関する研究はほとんどおこなわれていないのが現状であり、研究テーマの設定や研究活動の時期にも影響されている。

表1　研究テーマの分類からみた経年変化

テーマの分類 ／ 年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
高齢者の理解に焦点をあてた研究										(20)
高齢者理解		2		1	1	1				5
高齢者イメージ	2		1				1	1		5
高齢者の関係性					1		1			2
高齢者のQOL	1	1				2				4
ライフコースの視点						2			2	4
高齢者の看護に焦点をあてた研究										(77)
高齢者の生活の場				1	2	3	1			7
家族介護の支援		1	1	2	3	4	1	1	1	14
老年看護のケア方法		2		1	3	1	1	3	1	12
認知症高齢者のケア			2	1	1	2		3	5	14
老年看護に関連する制度	4	5	2	1	1	1	2	1		17
老年看護と倫理		1	1		1			1		4
看護の専門性			2	1	1					4
災害看護			2		1		1	1		5
計	7	12	11	8	15	16	8	11	9	97

表2　テーマの分類と研究テーマの一例

高齢者の理解に焦点をあてた研究	
高齢者理解	一独居高齢男性の日常生活とその支援への課題 医療現場における方言の必要性
高齢者イメージ	高校生の高齢者に対する意識調査について 高齢者と若者のイメージの広がりの比較～刺激語「労働」に関して
高齢者の関係性	独居高齢者の生活パターンと「なじみの関係」の分析と課題 施設利用高齢者の人間関係の様相と援助者の役割～ソシオグラムによる分析～
高齢者のQOL	高齢者の主観的幸福感 高齢者の生きがい活動とその関連要因～在宅高齢者と施設高齢者の比較～
ライフコースの視点	家族の中で孤立した男性高齢者の理解と家族の関わり～自分史作成を通して～ 高齢者が語るライフストーリーの意味
高齢者の看護に焦点をあてた研究	
高齢者の生活の場	広がる地域密着型サービス：宅老所の存在 高齢者施設におけるユニットケアの実際とその展望
家族介護の支援	高齢者の介護に直面した一家族の適応プロセスとサポートについて 看取りにおける家族の心理の変化～家族へのインタビューを通して～
老年看護のケア方法	施設で生活する高齢者女性がお化粧をする意味～化粧療法の効果～ 食事形態の違いによる視覚や味覚の変化
認知症高齢者のケア	バリデーションを通して考える痴呆性高齢者とのコミュニケーション 認知症高齢者の日常生活における自己決定とその支援
老年看護に関連する制度	デイサービス利用者の介護保険制度への意識 要支援と認定された特別養護老人ホーム入所者の現状
老年看護と倫理	高齢者の抑制廃止の現状 高齢者虐待の現状と課題～介護保険制度導入後3年間の新聞報道から～
看護の専門性	看護・介護学生の専門性への意識～ペーパーペーシャントによるケア選択の相違～ 特別養護老人ホームにおける看護職員の専門性に関する研究
災害看護	高齢者の心理に与える阪神・淡路大震災の慢性的影響と看護の課題～被災した高齢者のインタビューから～

表3　テーマの分類と研究対象者の内訳

高齢者の理解に焦点をあてた研究	
高齢者理解	高齢者施設利用者、一般高齢者など
高齢者イメージ	中学生、高校生、短期大学生
高齢者の関係性	一般高齢者、高齢者施設利用者とスタッフ
高齢者のQOL	一般高齢者、高齢者施設利用者など
ライフコースの視点	一般高齢者など
高齢者の看護に焦点をあてた研究	
高齢者の生活の場	高齢者施設利用者、スタッフなど
家族介護の支援	在宅療養者の家族介護者(訪問看護利用、デイサービス利用など)
老年看護のケア方法	高齢者施設利用者とスタッフ、短期大学生、一般など
認知症高齢者のケア	看護学生、施設利用の認知症高齢者、認知症高齢者の介護家族
老年看護に関連する制度	介護保険サービスを利用する高齢者と家族、老人大学受講者、短期大学生、一般など
老年看護と倫理	看護学生、高齢者施設の管理者など
看護の専門性	看護学生、高齢者施設に勤務する看護職
災害看護	被災高齢者、行政担当者など

3．研究方法

97編の研究方法の内訳を図2に、研究テーマと研究方法

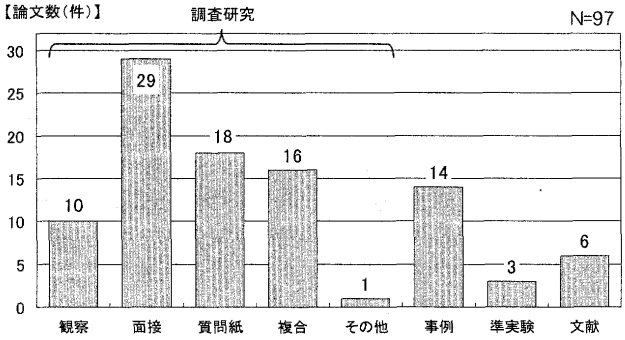

図2　研究方法別の研究数

表4　研究テーマと研究方法での内訳

テーマの分類／研究方法	調査					事例	準実験	文献
	観察	面接	質問紙	複合	その他			
高齢者の理解に焦点をあてた研究								
高齢者理解	2	1		1				1
高齢者イメージ			4		1			
高齢者の関係性				2				
高齢者のQOL	1	3						
ライフコースの視点						3		1
高齢者の看護に焦点をあてた研究								
高齢者の生活の場	1	2		3		1		
家族介護の支援		4	4			6		
老年看護のケア方法		4		4		1	2	1
認知症高齢者のケア	5	3	1	4		1		
老年看護に関連する制度	1	8	4	2		1		1
老年看護と倫理			2				1	1
看護の専門性			3			1		
災害看護		4						1
計	10	29	18	16	1	14	3	6

表5　研究対象者と研究協力施設の内訳

研究方法		研究対象者／研究協力施設
調査研究	観察法	一般高齢者、施設利用高齢者とスタッフなど ／ グループホーム、介護老人福祉施設、地域など
	面接法	介護保険サービス利用者、施設利用高齢者とスタッフ、家族介護者、被災高齢者、行政職員など ／ 介護老人福祉施設、訪問看護ステーション、在宅介護支援センター、デイサービス・デイケア、社会福祉協議会、認知症高齢者家族会、診療所、行政など
	質問紙法	中学生、高校生、短期大学生、一般、介護保険サービス利用者と家族、施設スタッフなど ／ 中学校、高等学校、デイサービス、訪問看護ステーション、介護老人福祉施設など
	その他	短期大学生、高齢者 ／ サテライト・デイ
	複合的な方法	施設利用高齢者とスタッフ、シルバー人材センターの管理者と登録者、／ 種々の高齢者施設、シルバー人材派遣センター
事例研究		一般高齢者、施設入所高齢者、家族介護者 ／ 介護老人保健施設、グループホーム、学生の家族
準実験研究		短期大学生、健康な若年者と高齢者 ／

での内訳を表4に、研究対象者と研究協力施設の内訳を表5に示した。

調査研究が74編で最も多く、全体の3/4以上を占めた。参加観察法は10編で、そのうち半数の5編が「認知症高齢者のケア」であった。面接法は29編で、「老年看護に関連する制度」が8編と多く、「家族介護の支援」「老年看護のケア方法」各4編、[高齢者のQOL」「認知症高齢者のケア」各3編など、幅広いテーマで用いられていた。質問紙法は18編で、「高齢者イメージ」「家族介護の支援」「老年看護に関連する制度」各4編、「老年看護の倫理」3編、「看護の専門性」2編など、意識調査や認知度調査を目的とした研究が多かった。参加観察法、面接法と質問紙法を複合的に使用したものは、「老年看護のケア方法」「認知症高齢者のケア」各4編、「高齢者の生活の場」3編など、複数の方法を補完的に用いて情報収集した研究が16編あった。高齢者と短期大学生が同じ刺激語からイメージマップを記述した研究は「調査研究：その他」と分類した。調査研究では、さまざまな高齢者関連施設の協力を得ながら、研究対象者も中学生、高校生、短期大学生から一般高齢者、施設利用高齢者とその家族、施設スタッフなど、年齢層や健康状態も多様であった。

事例研究は14編あるが、臨地実習での受け持ち患者を対象とした研究はなく、個人や一家族を対象としてインタビューや自分史作成などによって情報を得た研究であった。研究対象者の中には、学生の家族や知人も含まれていた。

準実験研究は3編で、短期大学生や健康な高齢者を対象に、食事援助テーマにした「老年看護のケア方法」2編、身体拘束と関連した「老年看護と倫理」1編であった。
文献研究6編は、「高齢者理解」「ライフコースの視点」「老年看護のケア方法」「老年看護に関連する制度」「老年看護と倫理」「災害看護」各1編であった。

Ⅳ．考察

1．老年看護学に関する卒業研究の動向

この9年間に取り組まれた研究テーマの動向と高齢者や老年看護に関係する社会的背景にいくつかの関連がうかがえた。まず、2000年の介護保険制度スタートとの関連が挙げられる。介護保険制度の認知度やサービス利用に関する「老年看護に関連する制度」の研究が1999～2001年をピークに、その後は毎年1編程度で推移している。介護保険制度に関連する研究は、数は少ないものの2006年まで継続して取り上げられたことは、制度施行5年の評価への関心を意味するものであった。また、在宅介護者の介護負担やQOLをテーマとする「家族介護の支援」の研究が2000年から2004年まで徐々に研究数を増やし、その後も毎年取り組みがある。さらに、「老年看護と倫理」では、2000、2001年に身体拘束に関する研究テーマがあり、介護保険制度とその前年（1999年）に施行された身体拘束禁止規定との関連が考えられた。

その他の関連としては、「認知症高齢者のケア」に関する研究は2001年からほぼ毎年みられるが、2004年以降研究数が増加しており、2004年の痴呆から認知症への名称変更との関連が考えられた。また、「災害看護」に関する研究は、2001年の2編は前年の鳥取県西部地震が、2003年と2006年の2編は阪神淡路大震災がそれぞれの研究動機と関連していた。

今回の分析では、卒業論文の記述内容をデータとしたため、学生の研究の動機は明らかにできなかった。今後は、学生の研究動機となる要因とその動向を分析し、教育に活用していくことも課題である。

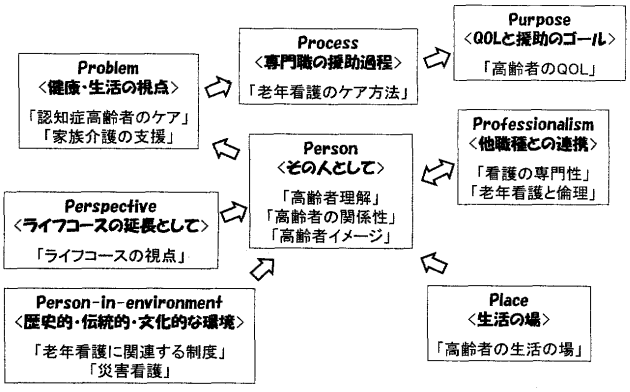

図3　高齢者理解の視点「8つのP」と看護研究テーマ

2．卒業研究のテーマと学習目標との関連

A短期大学看護学科の老年看護学では、臨地実習目標において、高齢者理解と高齢者ケアの学びの視点を「8つのP」として掲げている[2]。学生の卒業研究のテーマのキーワードと「8つのP」との関連を図3に示した。

①高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する（Person）に関連するキーワードは、「高齢者理解」「高齢者の関係性」「高齢者イメージ」であった。日常生活の様子や老化現象が生活に及ぼす影響、高齢者の社会的な側面の理解を深めるテーマであった。「高齢者イメージ」は、看護学生や一般を対象に高齢者に対するイメージを調査したテーマであるが、看護の対象となる高齢者、老年期のイメージを明確にしていくことは、看護専門職としての成長や発達に関連することである。そのため、高齢者理解と高齢者ケアの学びの視点に、学生自身の自己成長に関連するキーワードの追加の必要性が示唆された。

②高齢者の健康に関わる問題について、総合的に理解する（Problem）に関連するキーワードは、「認知症高齢者のケア」「家族介護の支援」であった。高齢者の健康問題としては、認知症以外の傷病名は研究テーマにほとんど挙がっていない。研究テーマの設定時期が2年次後期であるため、具体的な傷病名を挙げた介入研究が困難な状況のためと考えられた。「家族介護の支援」は、高齢者の健康障害が介護家族に与える影響を理解し、家族への支援のあり方について研究的に取り組んでいた。

③家庭、福祉施設、保健施設、医療施設など高齢者の生活の場を理解する（Place）に関連するキーワードは、「高齢者の生活の場」であった。ユニットケアや宅老所など新しいスタイルの生活の場や、海外研修で見学した高齢者の生活の場について紹介し、知識を広げることができていた。

④高齢者の健康問題にかかわる専門職の援助過程を理解する（Process）に関連するキーワードは、「老年看護のケア方法」であった。学内演習との関連も深い高齢者の食事の援助や、アニマルセラピーや化粧療法などの新しいケアの紹介が中心であった。②Problemと同様に、臨床的な介入研究はみられなかった。

⑤個々の高齢者のQOLを高めるための援助のゴールを理解する（Purpose）に関連するキーワードは、「高齢者のQOL」であり、高齢者のいきがいや主観的幸福感をテーマに取り組んでいた。QOLの概念は広く、今後も対象者の選定やQOLの定義の検討を含め、研究的にも深めていけるキーワードである。

⑥高齢者のライフコースの延長線上の生活者として理解する（Perspective）に関連するキーワードは、「ライフコースの視点」であった。ライフストーリーの聞き取りや自分史の作成を通して、個人の理解を深めた内容であった。戦争体験などの時代的な背景の違いや喪失体験などの人生経験は、学生の経験では想像もできない内容を多く含むものであり、個人の理解と高齢者世代の理解の両側面で意義のあるキーワードである。

⑦高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する（Professionalism）に関連するキーワードは、「看護の専門性」「老年看護と倫理」であった。「看護の専門性」では、高齢者施設での看護師の役割や看護職とケアを協働する介護職について、「老年看護と倫理」は身体拘束や高齢者虐待について取り組んだ研究が多かった。

⑧高齢者とその人と取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する（Person-in-environment）に関連するキーワードは、「老年看護に関連する制度」「災害看護」であった。「老年看護に関連する制度」は介護保険制度やそのサービス利用に関連するテーマがほとんどであり、「災害看護」は近年の地震災害がその後の生活に与える影響や支援内容などを調査した研究であった。いずれも、この9年間の高齢者を取り巻く環境的な変化に焦点をあてたキーワードであり、社会の変化に伴う高齢者のニーズをとらえようとする研究といえる。

3．今後の老年看護学領域での卒業研究の指導上の課題

『高齢者の理解に焦点をあてた研究』は、老年看護学に関連したこの9年間の取り組みの2割であったが、面接法や参加観察法を用いて研究対象者の限定された研究が多かった。わが国は少子高齢化の急速な進展とともに疾病構造も変化しており、健康寿命を延ばし、生活の質を高めていくために、21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）として、健康づくり施策が推進されている[3]。今後は、高齢者の健康レベルや居住地域など、研究対象者をバリエーション豊かに設定した取り組みも必要である。高齢者の健康維持・増進に活用できる研究は現代社会のニーズに応えることにもつながる。

また、高齢者の人生経験や価値観にふれる研究を行う

ことは、世代間のギャップを縮める知見が得られると考える。これまでは、個人を対象にライフヒストリーや自分史作成などを用いた研究が行われているが、集団を対象者とした介入や、対象者や研究目的に合わせて回想法やライフレヴューなどを含めた方法を検討して取り組んでいくことも必要である。

『高齢者の看護に焦点をあてた研究』では、「認知症高齢者のケア」に関する研究数は増加傾向にあり、そのテーマも幅広くなっている。近年の老年看護学領域における研究の動向には、認知症高齢者のケアに関するもの[4)5)6)7)8)9)]が数多く報告されており、今後も老年看護学のトピックの1つと推測される。学生の研究の取り組みにおいても、認知症高齢者の理解、コミュニケーションなどの具体的なケア方法、自己決定の支援などの倫理的側面、家族介護者への支援など、多様なテーマを設定して研究の蓄積をはかることが必要である。

「老年看護のケア方法」で取り組まれた研究テーマは、これまでアニマルセラピーや化粧療法などの新しいケア方法と難聴高齢者とのコミュニケーションや食事の援助などの基本的な援助とに大別できる。今後も、注目される新たなケア方法に関心を寄せるとともに、排泄や睡眠など基本的な生活の援助に関する取り組みが増えることも期待したい。また、社会背景との関連を視野に入れながら研究テーマを設定することは重要である。これまで取り組まれていないテーマとしては、老年看護におけるリスクマネジメントがある。1999年の患者取り違え事故以来、医療施設でのリスクマネジメントは急速に発展したが、高齢者施設においては様々な理由からリスクマネジメントの推進が十分とはいえない状況[10)]であり、今後の課題となるテーマである。また、認知症への名称変更や高齢者虐待防止法の施行を受け、老年看護における倫理的課題もますます重要になると思われる。

謝辞

研究をまとめるにあたり、貴重な資料を提供してくださったA短期大学卒業生の皆さまに深く感謝いたします。

文献

1）古城幸子、木下香織ほか：3年課程看護学生の「看護研究」への取組みと教育評価．新見公立短期大学紀要、26、51-60、2005.

2）古城幸子、木下香織：高齢者理解を深める臨地実習のねらい．新見公立短期大学紀要、20、1-9、1999.

3）健康日本21ホームページ［インターネットOn line］［2009年2月］http://www.kenkounippon21.gr.jp/kenkounippon21/about/intro/index_menu1.html

4）三林聖司、荻田美穂ほか：わが国の認知症高齢者を対象にした転倒に関する研究の動向と知見．滋賀医科大学看護学ジャーナル、6（1）、59-62、2008.

5）鈴木みずえ、磯和勅子ほか：認知症高齢者への音楽療法に関する研究の動向と看護研究の課題．看護研究、39（4）、275-289、2006.

6）鈴木みずえ、Brooker Dawnほか：パーソン・センタード・ケアと認知症ケアマッピングを用いた研究の動向と看護研究の課題．看護研究、39（4）、259-273、2006.3

7）鈴木みずえ、グライナー智恵子ほか：認知症高齢者のQOLの概念・評価尺度の動向と今後の研究の課題．看護研究、39（4）、247-258、2006.

8）荻野悦子、山田律子ほか：痴呆高齢者の睡眠・覚醒リズムと光の効果に関する研究の動向．北海道医療大学看護福祉学部紀要、9、143-152、2002.

9）山田律子：痴呆高齢者の摂食困難の評価とケアに関する研究の動向と課題．看護研究、35（5）、407-421、2002.

10）湯浅美千代編：認知症高齢者のケアマネジメント．すぴか書房、53-55、2007.

Trend of the graduation researches in the geriatric nursing area

Kaori KINOSHITA, Sachiko KOJO

Department of Nursing, Niimi College,1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585 Japan

Summary

The purpose of this research is to clarify the trend of the graduation researches that deal with the geriatric nursing for nine years from 1999 in A Junior College Nursing Department. Ninety-seven research papers concerning the geriatric nursing were analyzed among 561 graduation researches for nine years. Topics of research were able to be classified into 12 groups and divide them roughly into "Research that focused on the senior citizen's understanding" and "Research that focused on the geriatric nursing". The social background such as the enforcement of nursing-care insurance system in Japan and the revision of Japanese technical term of dementia, seemed to be related to the trend of topics of researches.

Keywords: graduation researches, elderly people, geriatric nursing, trend of graduation researches